

R7 特別の教育課程についての自己評価・学校運営協議会による評価

1. 学校評価（教員）

（1）「プロジェクトタイム」

- ・令和6年度より、市「未来の学び研究推進事業」の3年間の指定を受け、外部講師等の指導・助言のもと、カリキュラムの見直しと試行を行っている。質の高い探究的な学びに向けたヒントを得ることで、次年度の研究の方向性を明確にすることができた。
- ・令和7年度は、後期課程のカリキュラムについて、地域の文化施設を生かした学習内容に修正したり、キャリア教育の視点で新たな体験活動を取り入れたりするなど一部見直しを図った。そのことにより、生徒の課題意識や学習意欲が高まり、より主体的な学びの姿が見られ、自己の生き方を広げる機会となった。

（2）「コミュニケーションタイム」

- ・令和7年度は、外国語科・外国語活動の授業だけでなく、他教科においてもALTを活用し、授業の中で児童生徒が本物の英語に触れる機会を豊富に設けたことで、英語が身近な存在になってきている。
- ・前期課程低学年では、他教科等と連携しながらコミュニケーションスキルを段階的に身に付けることができた。高学年では、プレゼンテーションづくりや文化祭での発表などを通して目的に応じて表現する力が身に付いてきた。後期課程では低学年向けの紹介等さまざまな発表場面で英語を用いる機会が増え、各学年の発達段階に応じてコミュニケーションの力が付いてきている。

2. 学校運営協議会評価

（1）「プロジェクトタイム」

- ・各学年で発信の場が設定され、子供たちにとって地域の魅力発見の機会になっている。松東地区の豊かなリソースを生かした学習内容になっている。また、外部人材を積極的に活用しており、開かれた学校づくりが具現化されている。
- ・今後は、主体性の育成が重要である。地域を生かした学習の発信の場をさらに設けるなど方法を工夫し、「みらい探究科」での学びをより多くの方から評価してもらうことを期待している。

（2）「コミュニケーションタイム」

- ・1年生からの英語教育は本校の大きな魅力である。英語の免許をもつ教員が専門的な指導を行い、ALTとの対話を児童が楽しんでいる様子は他校にはない光景である。
- ・デジタル学習基盤を活用した情報教育はこれからの時代に不可欠である。1人1台の学習用端末をさらに生かし、これからの時代に適した教育を展開してほしい。